

# マイトーク MY TALK

発行：中央大学放送研究会OB会（会長／砂岡茂明）

住所：〒192-0351 東京都八王子市東中野742-1 中央大学放送研究会気付

発行日：平成19年12月

## 第10号

## OB会を一層盛り上げよう！！

—先輩、後輩の垣根を越えた楽しみの場—

### OB会長に就任して

OB会長 砂岡 茂明（十二期）



先の総会で水上虎馬雄さん、藤原尚武さんに次いで、三代目の会長に選任され、重責に身の引き締まる思いです。

OB会活動には、幹事長二期と副会長一期の通算九年携わっており、これからの三年はその集大成と考えております。

まず、OB会の永続的発展の基盤づくりを行うため、以下の施策を推進してまいります。①組織の強化（OB会の諸行事に参加するアクティブ会員の増加）②財政基盤の確立（会費納入者の拡大）③魅力あるOB会づくり（各種イベントの開催等）

OB会は、横のつながり（同期）と縦のつながり（先輩・後輩）の相乗効果で発展しますが、基本になるのは、同期会だと思います。あまり活動していない期の方々は是非一度同期会を開いてみて下さい。クラス会と違った楽しさがあるはずですよ。

中央大学には数々のOB組織がありますが、その殆どは、学年会あるいは地域の集まりであり、同じ趣味に青春を傾けた同期・先輩・後輩で構成するサークルのOB会組織は極めて少なく、希少価値があります。初期の卒業生と現役では半世紀以上も離れていますが、「放送」という共通の話題で懇親が図れるという素晴らしい組織ではないかと思えます。

この大切な財産であるOB会を維持・発展させるため、役員一同精一杯頑張っていく所存ですので、会員の皆様のご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。

### 退任のご挨拶

前OB会長 藤原 尚武（八期）

此度、二期六年勤めさせていただいたOB会長を退任することになりました。この間、先輩、現役の皆さんの絶大なるご協力をいただき、何とか、その任を全うすることが出来ました。厚くお礼申し上げます。

六年前、大役をお引き受けるに当り、まず、私の頭をよぎったのは、水上先生の次の様な言葉でした。

「この所の周年行事は、どうも出席メンバーが固定していて、年々高齢化が進む……」

「現役とOBとの交流も少ないね……」

水上先生のお元気な頃は、楽しさの中で、さして気にも止めなかつたのですが、OB会長になり、ずしりと胸に迫る言葉でした。

確かに、四十周年、四十五周年と、大変楽しい会でしたが、新OB、現役の参加は極端に少なく、水上先生は、その事を心配されていたのだと思えます。

私は、思い切って加賀美先生にお願いしてみました。五十周年は、かつての様に、現役主体で催したいと思うのですが、と。

同席していた現役の役員にとっては、まさに寝



耳に水の話だったと思いますが、加賀美先生から「OB会の五十年ではない、放研の五十周年なんだ」という力強いお言葉もあって、五十周年行事は、OB会支援のもと、現役主体で企画、運営することを快く引き受けていただきました。それ以来、OB会と現役との交流は活発になり、又、深めることも出来たと思います。

そして、今年の「五十五周年」、五十周年を担当した当時の現役諸氏が、新OB会員として数多く出席していました。又現役の参加者も多く、まさに「放研五十五周年」だったと思います。水上先生に、いい報告が出来ると思いました。

OB会長退任後も、現役から声がかかり、時折、多摩の放研会室に顔を出しています。

二期六年、本当にありがとうございました。

## 放送研究会OB会第六回総会及び

### 創立五十五周年記念式典挙行

OB会幹事長 斎藤 剛(十五期)

平成十九年八月四日、東京赤坂の「ANAインターコンチネンタルホテル東京」に於いて放送研究会OB会第六回総会及び放送研究会創立五十五周年記念式典が、OB会と現役の共催で挙行されました。

総会は、前田OB会副会長の司会で進められ、経過報告、会計報告及び事業計画の説明をさせて頂きました。

会計については、有松会計監査人から会計報告が適切であった旨の会計監査報告がありました。

その後、新役員の選任、会則の一部改正等の議事が満場一致で可決され終了いたしました。引き続き行われた五十五周年記念式典には、学友会からご来賓三名、現役六四名、OB一〇三名の合計一七〇名が出席致しました。

式典は、現役の司会で進行し、まず初めに放送研究会会長の加賀美鐵雄法学部教授の挨拶があり、次にご来賓を代表して学友会副会長の阪口修平文学部教授よりご祝辞を戴きました。

最後に五十五周年記念を祝してOB会から現役への記念品贈呈をもって式典を終え、続いて砂岡茂明新OB会会長の乾杯で懇親会に移りました。

創立当時のOBと現役では、半世紀以上の年齢差がありますが、「放送」という同じ趣味を持つもの同士、熱気溢れる交流の輪が沢山できました。

懇親会に華を添えて戴いたのは、中央大学マンダリンクラブOBの率いるアンサンブルトレモロ・マンドリンクラブの演奏でした。曲目は「千の風になつて」他、最後はマンドリンの伴奏で「惜別の歌」を全員で肩を組みながら合唱し、次回六〇周年での再会を約束して散会となりました。

## 放送研究会五十五周年を迎えて

放研委員長 鈴木 冨季(五十七期)

放送研究会は今年で創立五十五年目を迎えました。半世紀以上の長い歴史のあるサークルです。しかしこのことは、現役生の中ではあまり意識されておらず、私自身初めの頃は放送研究会がどんな風に築かれてきたのかなんて考えたこともありませんで

した。

そんな私が副委員長になったのは一年生の委員長・副委員長はOB担当としてOB会に顔をさなければならぬということも良く知らないま役職につきましました。そのため、駿河台記念館でししば行われるOB会幹事会に初めて伺ったときはも左も分からず、当時委員長であった加藤先輩にいていくことしかできませんでした。何度か幹事に顔を出しているうちに、OB・OGの方々から送研究会の思い出話を聞く機会がありました。おに出でくる昔の放送研究会は今と異なる点が多かったです。一方で意外と共通点も多かった。例えば、毎年文化祭で設置しているサテライトスタジオでの企画をOB会の方々も大学時代に経験したり、サークル仲間との過ごし方がどこか現役似ていたり。そういったことを知っていく中で私OB会を身近に感じるとともに、現在の放送研究は長い時間の中で様々な人が関わって作り上げてきたものなのだというを自然と理解できうになりました。

更に強く放送研究会の歴史を実感したのは、年八月四日に行われた放送研究会五十五周年記念典の時でした。幹事会の比ではないほど沢山のB・OGの方々が出席し、「こんなに様々な人放送研究会にいたのか」と、驚くばかりでした。場にいるそれぞれが放送研究会で青春をすごし、送研究会を受け継いできたのかと思うと、なんだか大きな川の流れの中にいるような気分でした。

式典の帰り道。私は同期の女の子たちと共に来について語りました。「もしかしたら、私たちが七十歳になる少し前には放送研究会百周年記念式



が行われるかもしれない。そして私たちは今日の大先輩たちのように仲間との再会を喜んで、現役の子達を暖かな目で見守っているのかな…。「こんな他愛も無い想像がいつか実現されると良いなと思います。」

今後放送業界は更なる変革を遂げていくでしょうが、その中で中央大学放送研究会も大きく発展することを願うばかりです。

## 同期会

### レポート

青春時代、縁あって同じ釜の飯を食べた仲間と云うのはその後の様々な人生航路を歩む中でも、格別の位置をしめていくかもしれません。今回は、十三期、十四期の皆さんのレポートです。



学生時代に身に付けていた会員バッジ

(第14期ホームページタイトルより)

## そうだ、京都行こう

水上 眞子 (十三期)

平成十九年、十月八日、因田幹事の企画の下、岐阜から渡辺、関東から佐藤、川鍋、越、星、前田、柳田、浪久、水上、北海道から乗安の総勢十一名が、京都新阪急ホテルに集合しました。

半年の間に二度も大病をし、生還したという因田幹事の、ゆつたりとした企画、余裕あるスケジュールで、当日は「二条城」、翌日は「大原の里散策」と、ゆつくり過ごしました。

私など、「二条城」は、高校の修学旅行以来だっ



再建なった大原寂光院にて (筆者後列、右より2人目)

たでしようか。鶯張りの床を踏みしめ、徳川の大名の姿に思いを馳せ、紅葉前の庭園を散策したものでした。

二日目の、寂光院、三千院とも、観光シーズン前の静かな木立の中を、しみじみと、(多少騒々しく) 廻りました。

さらに、「別冊付録」とも言うべき、八瀬原の瑠璃光院、古知谷の阿弥陀寺、清水焼の窯元で、ロク口、絵付けを見学できたのも良い思い出になりました。

夕食は、一日目が烏丸綾小路「割烹いしい」、二日目が祇園「大のや」の湯葉料理、どちらも、程よい個室で和気あいあい、近況報告に舌鼓と相槌を打ったのでした。

六十五歳ともなると、やはり、健康問題が話題の多くを占め、お互いいたわり、励ましあい、気遣うようになり、同期の友情を確認した二泊三日でした。

来年は、十三期同期会の十三回帰(誤字にあらざ)横浜在住の佐藤猛志氏が、余暇の全てを投入(?)して、企画に当ることを誓い、散会となりました。

## 六十三歳の抵抗……

こっちへおいで!

星 勝二(十三期)

皆さあ〜ん、お晩でやんす! おじぎじぶりで〜ず(福島訛りのつもり、今デイズニールランドの打ち上げ花火が聞こえています) 元気でやっとなりますか



いのう？」

今から四十五年前、紅顔の演劇少年（無論私のことです）がお国訛りをどっかと背負い上京し、殊もあろうに放送研究会に入部しようとは！（当時の劇団部）：紅顔の美少年？も今や厚顔の美醜年になつてしまいました。いつまでたつても訛りの抜けないう「劇団の星」としても有名でした（流れ星にならなくて本当に良かった）。何万分の一の出会いの中で先輩諸兄、後輩諸氏、同期の皆さん方とこうして元気でお付き合いが出来ることは、本当に幸せなことです。

さて、十三期の旅行も数えること十一回目（十月一日〜二日）秋の気配とともに、金木犀の優雅な香が鼻に届く頃行なわれるのです。「今年は金木犀（の香り）が弱いわねえ」以前の旅行で伊豆の天城を越え、海岸線近くの里山を歩いていた時の同僚の女史の言葉であった。「その匂いが五感を潤す時、旅行会がやって来るのだ」何のことはない、秋の入り口には必ずその香りが漂って来るものなのだ。しかしそれは、生まれ育った故郷の匂いでもあり、時には人生の魔沙架の坂の苦渋の匂い、平穩無事の「幸せな香り」でもある。懐しく、切なく、愛しく、その年々の自分の姿が甦り、感慨深いものがある。金木犀とはそんな香りとともに、「思い出」を運んでくれるのである。これからも心のアルバムのページを飾ってくれるでしょう。

日本列島に大型秋雨前線が居座った旅行初日、箱根湯本もパラつく雨。しかしそれは一時のことで、次の日も傘の出番がなかった分、良しとしよう。大阪方面からは因田、渡辺の両君。札幌から乗安君が駆け付けてくれ、柳田、蛭田、前田の田の付く女史

三人と佐藤君、小生の計八名の参加となった。

蛭田峯代（急姓川上）君が眼病を患ってしまい、今回は併わせて「蛭田君を激励する会」としました。



（筆者、後列中央）

「花とワインとコーヒ」を愛し、情厚き唇の右三分処で煙草を斜めにくわえ、浜つ子育ちのべらんめえ口調でまくしたてる、そんな元気な蛭田君なので、十三期に因んで十三種類の花の種苗を小田原名物梅ワインを添えて、庭のどこかで育み花咲かせてくれるよう、十三期一同よりプレゼントしました。しかし、「励ます人を間違ってしまったかな？」と冗談を言えるくらい元気があつたことを、ここに記しておきます。

宴会まで温泉に浸り旨い酒と肴で身も心もほぐれ、そして二次会カラオケ、部屋での歓談と気がついてみると深夜二時。カラオケ熱唱で火照つた体と心をビールで冷やし、三次会へ。しかし冷えるどころか歓談から論争へと、ますます熱くなる。「政治、経済、社会保障と教育の問題、自衛隊と戦争等々」：国家を背負う気概のある政治家がいなくなり、政治屋ばかり。税金を預かった金と認識しながら私利私欲の為に使い切り、日本列島に赤字の山脈が横たわ

る。まさに政治行政の確信犯だ。自由を謳歌する資本主義経済が発展するために必ず必要な、それに見合う「罰則」が整備されておらず、官僚たちの犯罪と何もしない犯罪。学校へ行けばバカになり（いじめ、不登校、先生の指導力低下等々）、病院へ行けば病気になるてしまう！百年安心の年金制度と誤魔化して掛金は上がり、支給額は減少！美しい日本とか言っちゃって、その為にお前ら何をするのだ！」まさに論争を越え「朝まで生激論」皆の叫びが聞こえてきた。還暦を過ぎた二、三年前からこの怒りはトーンアップした感がある。熱さ痛みに耐え抜いた六十三年間の社会への、人間への矛盾が重なって「六十三歳の抵抗」として怒り爆発。熟年期にさしかかった我々は今、第二の反抗期なのではあるまいか？

人は立つ位置に依つて物言いが違ってくるものだ。肩書がそうさせるのである。肩書という重い鎧を脱ぎ捨て、利益追求のしがらみから開放された今こそ自由に物を言い、何事にもとらわれず残された人生を「楽しみたい」：熟年世代の特権だと思つたのですが、皆さんは如何でしょうか。「右の頬を殴られたら左の頬を出せ」などという生き方はしたくない。聖人君子にはとうてい成り切れないからです。「眼には眼を」というのも何とも具合が悪い。そうだ！この二つの間の按配を計れば良いのだ。世の中この按配で成り立っている、今更ながら思う訳である。仏教の祖、仏陀はこの「按配」で開眼したそうだが、それでも心が満たされず山を下り放蕩三昧の日々―空しさを感じて苦悩が続く。やがて「ものごとくに按配あり」と悟りを拓いたという。何事もほど



ほどに過ぎたるは及ばざるが如し—少々我慢しろということであろう。果てしなき欲望を切り捨て、果てしある願望とした時、人間の業から解き放されて、心地良い自由を感じるのである。—能書・講釈はこの位にして。少々恥ずかしくなってきましたので、ではそろそろ……「皆さ〜ん早くこっちへ来て熟年世代の楽しさを共に満喫しようではありませんか！」

二日目は霧の中の箱根一周観光を終え、熱海へ下り散会となる。来年は、因田君の幹事のもと、千年の東京都の空の下に集う予定です。『本当に仲間との旅行って良いものですよ！』

## 久方ぶりの同期旅行

紀田 正昭(十四期)

今年の夏、放鳥(自然に戻す)されたコウノトリから産まれた雛が、自然界では四十六年ぶりに巣立ちをして話題になりました。そこは、兵庫県北部の豊岡市。実は、この豊岡は私の故郷なのです。この山陰の町を、去年六月、わが放送研究会十四期の仲間九人がはるばる訪ねてくれたのです。情緒豊かな「城崎温泉」と美しい日本海の「竹野海岸」への、三日間は心に残る楽しい旅となりました。初日、夕方四時前、みんなの到着です。東京、神奈川、埼玉、山梨、静岡、それに香川、広島から続々「城崎」へ到着。みんな懐かしい笑顔で、駅では久しぶりの再会に沸きました。夕日の中、浴衣姿の温泉客がしっとりした町並みを、カランカランと下駄の音を響かせながら行き交う姿は風情、情緒満点。こんな中、み

んなで温泉にゆったり身をゆだね、旅の疲れをいやしてもらったあとは、言わずもがなの大宴会の始まりです。卒業以来、初めて顔をあわせる者、放研五十周年の式典以来の面々と、懐かしい話、お互いの近況報告に話は飛び交い、地元近海の新鮮な味にアルコールの力も加わって、大いに盛り上がりました。まさに「友、遠方より来る。また、楽しからずや」。の一言です。

そしてその後、温泉街へと繰り出したのですが、なんと！ここで十二期の先輩諸兄一行に出会ったのです。旅の途中、予定が少しずれたとのこと。中には卒業以来、四十年ぶりにお目にかかれた方もあり、大感激の夜となりました。

翌朝、残念ながら、都合で止む無く帰らざるをえない木川、松永両君とは、ここで別れを告げることに。わずか一泊のために、わざわざ遠い静岡から。本当に頭の下がる思いでした。この後、残る八人が二台の車に分乗、いざ、出発です。

まずは「コウノトリの故郷公園」へ。おとし、放鳥式に出席された秋篠宮ご夫妻に第三子ご誕生以来、このニュースは「全国区」になりました。今、百数羽が飼育され、これまでに十七羽が放鳥されて



一城崎にて一(筆者、前列右より2人目)

ます。続いて「植村直己冒険館」に立ち寄った後、「鳥取大砂丘」へ。白浜が東西十六キロにわたって広がり、頂から望むと、砂を踏む人たちが、まるでアリのよう。沖へ広がる真っ青な日本海と広大な白砂の大パノラマはまさに圧巻、見事なものでした。そこで昼食のあと、今度は遊覧船です。心地よい潮風を頬に受けながら、荒波洗う奇岩、怪岩を巡り、潮の香と珍しい景観を満喫しました。そして高さ四十一mは日本一というJR山陰線「余部(あまるべ)鉄橋」。この春から架け替え工事が始まっています。最後に、円山応挙の襖絵が残る古刹「大乘寺」で一休みのあと、その日の宿「竹野海岸国民休暇村」へ到着。早速、夕暮れ間近のしずかな海を眼下に、ゆったりと温泉へ。湯上りの乾杯のビールは五臓六腑に染み渡りました。途中の車の中では、トシや健康のことをはじめ、毎日のアレコレに話が弾みました。みんな「これからも気持だけは若くいきたいネー」と話していると、今回、紅一点の原さんが「私、車は二種免許ヨ」と切り出して、みんなビックリです。疲れ気味のオジンにもファイトの湧いてくる、いい話ではありませんか。彼女の若さの源はこの辺にあるのでしょうか。

そして旅はいよ





いよ最終日。フィナーレは日本三景の一つ「天の橋立」です。展望台からの「股のぞき」は大小千本の松並木が天に昇る竜に見えるというのですが、果たしてみんなはどうだったのでしょうか。それにしても二日間、懸命にハンドルを握ってくれた有福、伊藤両君には感謝の言葉もありません。高松、広島と長距離をやってきて、その上、全くはじめてのコースと、本当に良く頑張ってくれました。

こうやって四十年ぶりの再会があり、さまざまの話に花が咲いた和やかな旅は、またひとつ忘れがたい思い出を残して幕を閉じました。

遠路はるばる訪ねてくれたことが、また、久方ぶりにみんなで呑み、笑い、語り合えたことがただ嬉しくて、他にはかえがたい貴重な贈り物をしてくれたような気持ちになったのでした。

きょうもコウノトリが町の空を静かに舞っています。

## 故、山田哲先輩 残映に捧ぐ

蛭田 峯代(旧姓川上)(十三期)

本年、十月十一日の昼下がり、同期の柳田さんより、劇団部先輩の山田哲氏の訃報を受けた。「えっ何故、どうして、本当なの哲先輩が……」と矢継ぎばやの私の間に彼女も「実は私も今知ったばかりなの……」と絶句、二人の無念にしばし沈黙が重なった。あろう事か、私はその前夜、ラ・ロシエフコオ(仏)のモラリス文学に属する作家の翻訳文「箴言と考察」を読んでいた。この作家は元来、人の心

底に巣くう功利心に目をむけ、現実の虚偽をあばいてみせる手法を用いるがこの文の一節、死者へと対座する折りの残され人の死への嘆きは、実は残されし者の悲しみであり、死者は生きている人の為に流れる涙を忝(かたじけ)にするだけのもので、そういう嘆き、涙は偽善なのだと言張したものだ。昨夜、そして今日の知らせ、なにか縁(えん)なく不思議な感情がめくるめく私を襲った。

哲先輩と最後に久闊を叙したのは、二年前の夏放研OB総会の席上だった。その折「あなたの書きこんでいるもの目につく限り読んでいます。エッセイだけでなく論説も書くといい。今は町会の仕事をしているだけ、暇をみつめて新潟にいらっしやい。」「行きます。参ります。」そう会話を、Eメール連絡先の名刺を頂いて……なのに、先輩に対する後輩の遠慮が先だち、私は何の働きかけも行動もおこさず、悔い残る日を迎えてしまった。面影を偲ぶうちふと涙がわいた。にじむ目をげんこの背にすべらせて、時空を過去にひきもどし、先輩と会話し往時の景色の中に浮遊した。遅い、遅かったけれど何か先輩の為にアクションをおこさねばすまぬ気がした。最後に聞いた「論説も書いたら」の言葉が甦った。私は再びあの縁(えん)めいた作家の一文に急ぎひきかえした。死とは、偽善とは答えを求めて再度読んだ。確かにその文は、一条、的を射てはいる。だが、よしんば亡き人を悼む心情の根底に残され人の利己愛があったにせよ、その利己愛を促し、発露させた主体は(死者)なのだ。されば残されし人は客体であり、この二者の対峙、客体が対峙する中で、のこされ人が流す涙(作者の言う偽善の涙)は主体の在り日の質に反応するところまでは言及されず、又、客体へ

主体が及ぼした影響、条件にも及ばず結論が下されている。(人の行為が結果的に快をみる事を偽善と呼ぶなら、真善的なものは造物主の世界に限られてくる。)死は存在の消滅、有から無への転換、交流の断絶、能力、技術力の末消等、そこに涙するのは断じて偽善ではなく、再び構築叶わぬほろびの重き痛手からの回避、もしくは回避させたかった思いの力量不足、あるいは逃避の願望の姿勢なのだと言論しておきたい。

顧みて、哲先輩との憶い出を書きつらねれば幾紙面、必要ぞ！敢えて胸中にたたみこむ。

此岸から彼岸へ渡ってしまった先輩への愛惜が日毎募る。マス・メディアの要員として社会の一隅から拡大する社会へのまなざしは優しくあたたかな人柄をこよなく映したものであったに違いない。

「凍身(こりみ)に陽(ひ)がさせば恋(こ)もまたもどる」と一句ならえても死は凍結ではなく、葬と亡の二文字の中にあるのみとなった。先輩の笑顔と熱い心を忘れない。一つ目ではない二つ目の憶い出話を届けます。個称を使わず二人称のあなたを使って人を呼ぶ癖に「先輩、それって浮気のパレ防止の為ですか」と軽口たたいたら「あなたは大人ですね」と私の額を右手の指でちゃんと撥ねさせ「ハッハッハ」と笑っていたのは私が一年生の時でした。「さよなら」は言えません。「ありがとう」だけ申し上げます。

私はいまだ合掌すら出来ずにいます。

秋、天空高し、でも浄土はもつと、もつと遥かにあるのでしょうか。

風送る芒の花穂よ黄泉までも

哲様

まいる



平成19年8月開催第6回中央大学放送研究会OB会総会・55周年記念式典

(於：H19.8.4ANAインターコンチネンタルホテル東京)



1期～10期



11期～13期



14期～41期





50期~55期



現役 (1)



現役 (2)







# ホワイトボード

次のような活性化策が総会で承認され今後実行に移していくこととします。

## 【活動の充実】

① 幹事会の定例化 最低四半期に一回実施し、年間スケジュールを確定させる。  
(各期幹事を複数名に増員する。)

② 幹事会の地方開催 (旅行を兼ねる。)

③ 幹事会では、各種イベントを計画する。

・ 後援会 (OB会員の講師も含む。)

・ 見学会

(NHKアーカイブス、放送博物館、民放等)

・ 過去作品の視聴会

イベント等には、幹事を通して同期生等の参加を呼びかける。

④ 部会の設置 (活動中)

・ ゴルフ部会

・ スキー部会

・ アカデミア部会 (注)

## 【役員の仕事の明確化】

副会長の責任分担の明確化

・ 組織強化担当

・ アカデミア部会担当

・ 幹事会担当

(注) アカデミア部会について

(設置趣旨)

放研OB会会員リソースの活用によりOB会の活性化を図るとともに現役に対する支援、指導を

行う。

## 【活動内容】

現役会員の放送技術 (アナウンス、演出、技術力等) の向上のための諸活動。(例、定期的なセミナー、スポーツ講演会等)

## 【期待する効果】

現役・OBの交流によるOB会の活性化 (現役番組発表会へのOBの出席、新規卒業生のOB会活動参加率のアップ等)

## 【会計報告・監査報告】

第五期 (平成十六年七月～平成十九年六月)

(収入の部)	
会費	662,520
総会費内金戻り	766,000
雑収入	134
第4期繰越金	1,432,414
合計	2,861,068
(支出の部)	
会議費	331,282
会場費	868,529
慶弔費	35,750
事務費	11,750
製作費	532,932
通信費	85,592
その他	0
合計	1,865,835
第五期繰越金	995,233

## 計報

本年、次の方々が永眠されました

石井 雄氏 (五期) 六月

金野 涼二氏 (十五期) 六月

渡辺 亮子氏 (十期) (旧姓荒武) 八月

山田 哲氏 (十期) 十月

渡辺 新也氏 (十期) 十月

慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

中央大学放送研究会OB会第6期役員名簿

役職	卒業期	氏名
顧問		加賀美 鐵雄
会長	12期	砂岡 茂明
副会長	12期	若尾 英樹
副会長	13期	前田 絃子
副会長	14期	荒井 藤樹
会計監査人	14期	浅見 一策
幹事	15期	齋藤 剛
副幹事	17期	北島 宏幸
副幹事	17期	谷井 健
会計	13期	柳田 美根子
会計	41期	山本 洋右
現役	3年	鈴木 冨季
現役	2年	小田島 香

## 編集後記

赤や黄色の落ち葉が公園や歩道を彩り、紅葉季節も秋の深まりとともに冷え込む日が増え暖か食べ物や飲み物が恋しい頃となりました。(北国は早白一色の寒さですネ！)

会員の皆様におかれましては如何お過ごしでしょうか。

八月にOB会総会、放研五十五周年記念式典開催しましたところ本当に大勢のOB諸氏、そして現役諸君のご出席を頂き、大盛況の内に終えまして心よりの感謝と、残念ながら今回出席頂けなかった会員の皆様にマイトークにてご報告申し上げますことが幸いです。

今回も各期の皆様に近況報告の原稿をお願いいたしましたところ投稿頂き、改めまして皆様の若時に育んだ長い友情に感激でした。

皆様も各期毎に懐かしいお集まりの機会をもぜひ、どうぞその近況をご連絡下さい。

原稿がそろい次第何時でも発刊いたします。マイトークは皆さんの原稿と情報をメインに成いたします。

マイトークを読んで頂き是非各期毎の輪を拡大して下さい。

参加して良かった、会えて良かった、楽しかった、改めてそんな出会いの会にして行きたいと思ます。

斎藤 剛 (十五期)